

MC対応建機での施工状況紹介

日本道路建設業協会（道建協、西田義則会長）は18日、ICT舗装現場見学会を愛知県新城市の「令和4年度三遠道路3号トンネル新城地区舗装工事」の現場で開いた。写真で採用している技術を説明。

道建協がICT舗装現場見学会

真。中部地方整備局浜松河川国道事務所が発注し、佐藤渡辺が施工している。道建協の会員企業から約15人が参加。マシンコントロール（MC）対応建機による施工の様子を見学した。

見学会では、同事務所の柴田康晴副所長と阿川晃章工務第二課長が管内の事業や情報化施工の取り組み状況を紹介。発注図面から現場を3Dモデル化し、設計の不具合などを確認するなどBIM/CIMの活用を進めている例を



三遠道3号トンネル新城地区で

路盤工にはMCに対応し、トータルステーション（TS）からデータを受信、ブレードの高さや勾配を自動制御できるモーターグレーダーを使用した。起工測量や出来形検測は地上型レーザースカナ（TLS）で点群データを取得していることも紹介した。

参加者はトンネル内で、MCに対応し敷きならしの高さを自動制御するスリップフォームペーパーによる連続RC舗装の様子を見学。TSを設置する際の留意点や受信データを施工情報に変換するシステムなどについて、担当者の説明を受けた。

三遠南信道路の一部である三遠道路の3号トンネルは延長3566m。このうち同工事では876mの舗装を行う。工期は2023年2月までを予定している。

